

《ユイ》

ユイは規格外にでかいパピヨン。息子が10歳、娘が5歳の時に末っ子として家族の一員になり、12年間を僕らと一緒に山や海での生活、旅行や山歩きやサーフィンを楽しんだ。

2011年3月11日、あの日僕らはユイを一人だけ海岸から15mの自宅に留守番させ車で内陸の街に出かけていた。

僕らが住んでいた町は津波と火災で壊滅状態になり、翌日には30km北の福島第一原発が爆発した。あの日がユイが僕らの前から消えた日であり、毎年来るその日がユイの命日になってしまった。

あれから9年、縁もゆかりもない関西に避難移住し生活と作家活動の再建のためにひたすら前だけ見て死に物狂いで走ってきて、ユイのことも次第に過去のことになりかけていた。

あの日ユイはどうやって死んだんだろう？大きな地震と音におびえて自分のハウスに籠っていたところを津波が押し寄せ家ごと滅茶苦茶になりながら流され、溺れたか体が引き裂かれて息を引き取ったのだろうか……。

この2月27日から僕は東京のギャラリーTAGA2で個展をする。

3.11を挟む会期なので展覧会タイトルを「Dedicated to 3.11」、3.11に捧ぐとした。

東京・復興オリンピックが開催される震災から9年目にやっと僕はこのタイトルで個展をしようと思った。何も震災に対してゆるぎないメッセージや答えを提示しようと思ってるわけでもない。

ただ震災から9年間の僕の中の3.11に対して僕が僕自身に捧げたものだ。そう思ったらユイも作ろうと思った。

半割にしたクスの大木をチェーンソーや大斧で荒取りを始めた。その瞬間に僕は不思議な世界に誘われていった。

僕の心の中の風景は9年前のあの瓦礫の平原になり、瓦礫の隙間にユイらしき姿を見つけていた。荒取りはユイの上に覆いかぶさる瓦礫を一つ一つどけているような気分になり、木を彫ることは瓦礫の中からユイを掘り出す作業に変わっていた。

大きな瓦礫を取り除き、斧を小型のものに持ち替えて小さな瓦礫や泥や砂を取り除いていく。それはユイの体に沿って斧で刻みユイのフォルムを引き出す行為そのものだった。

僕はその時思った、ユイは走る夢を見ながら目を閉じていったかもなって。次第に次第にユイの体が瓦礫や砂の中から姿を現してきた。

僕はつい言葉に出して言ってしまった、「ユイ、ここにいたのか、9年間ずっとたった一人だったな、ごめんな、もう大丈夫だよ、もう大丈夫」。

斧を振り木を刻み始めて34年、こんな経験は初めてだった。

形を作るのでも説明するのでもない、僕が知ってるユイの体温や匂いや体の柔らかかさ硬さ息が僕の手を動かしかいつの間にか瓦礫の中からユイを抱え出していた。

震災から9年目、僕はあの日に戻りあの焦げ臭くスエたような臭いの滅茶苦茶な瓦礫の中からやっと我が家の末っ子を見つけ抱き上げることができた。

生前ユイは毎日朝晩に僕と海岸をブチジョギングしていた。今日は久々にユイと一緒に走る写真を撮ったよ。

